

「51対49」という思想

「暑い夏」である。

ロンドン五輪では、深夜にもかかわらず熱
烈応援をしてみました。なでしこジャパンの
掌々たる試合ぶりには「フェアプレーは金(メ
ダルに値する)。(12日付)」とその健闘をた
たえたが、心が揺さぶられる2週間だった。
必ずしも世界レベルのプレーだからだけでは
ない。自国が相手国を負かすこと自体にしび
れるのだ。たとえそれが自国選手のラッキ
なプレーと、相手国選手の気の毒なミスによ
るものであってもだ。ナショナルリズムとい
うものは、かくまでもゲーム観戦を盛り上げる
のか。古代ギリシャの知恵にない近代
国家間の戦争をスポーツ競技に切り替えたク
ーベルタン男爵の洞察に改めて脱帽した。

だが、熱波は五輪で終わらなかった。まず
は韓国から、そして中国から攻めのほってき
た。封印してきた領土をめぐる対立が一気に
顕在化、なお火種を探し延焼の機をうかがっ
ている。韓国大統領の竹島上陸には「深いト
ゲをどう抜く」(12日付)と、長期的な相互
利益に立つ問題解決を促し、香港人の尖閣上
陸に対しては「挑発の背後を見極めよ」(17
日付)と、慎重で柔軟な対応を求めた。

注意すべきは、ナショナルリズムのわなであ
ろう。国家を健全に支える抑制的なナショナル
リズムもあれば、暴走と自己増殖を繰り返す
結果的に国家の選択の幅を狭めるものもある。
開戦時、敗戦時いずれも外相だった東郷
茂徳氏の外交の要諦は「51対49」。つまり相
手に51を譲り、自分は49で満足する気持ち
を持つことだった。孫の東郷和彦氏が明らかに
している。ほぼ同等ではあるものの、相手に一
つ多く与える交渉術。これこそが最もいい結
果を生む、という。逆に言えば自らが一つ減
を背負うこと。政府も国民も共に覚悟を要す
ることである。(論説委員長・倉重篤郎)

― 次回は9月9日に掲載



海上保安庁の巡視船を
下り連行される香港の
活動家―那覇市で16
日、武市公孝撮影